

吉田 豊

文献でしか残されていない死語の研究は、現在に伝わる文献そのものの量や内容、文献がカバーする時代に大きく影響される。イラン系の中世語であるソグド語の場合も同様である。シルクロードで出土するほかの言語と比べて、残された資料全体の量は少ないほうではない。しかし、断片が多いだけでなく内容と時代の点から均質な資料は多いとは言えず、言語研究の上では理想的とは言えない。しかしその一方でソグド人が果たした政治史・文化史的な役割を考える際には、いろいろな時代の多種多様な資料が見つかることはむしろ幸いである。本稿では筆者の最近の研究から、ソグド人と古代のチュルク系民族との関係にかかわる3種類の資料をとりあげてみたい。¹

1 前号(『京都大学文学部研究紀要』49号, 2010, pp. 1-24)に掲載した拙稿「新出ソグド語資料について」の公刊後、中国で発見された新出のソグド語資料について管見に入った事項を記しておく。一つは2-3頁で触れた、ベゼクリク出土の漢文碑文断片(楊公造寺碑)の行間に彫られたソグド語銘文である。現在は吐魯番博物館が所蔵するこの碑文の写真は、李蕭主編『吐魯番文物精粹』上海2006, p. 145に拓本の写真が掲載されている。残念ながら、写真は小さく鮮明さを欠くため銘文は読みづらい。当面の筆者の読みは次の通りである。

5 頁で触れたニヤ出土のソグド語の手紙断片は、N. Sims-Williams・畢波「尼雅新出粟特文殘片研究」『新疆文物』2009/3-4, pp. 53-58 で発表されている。

は、『周書』巻 50「突厥伝」に記録された酒泉の安諾槃陀の記事だとされしばしば引用される。彼は 545 年に西魏から突厥に派遣された。²ただこの事件のすぐ後の時代には、ソグド人とチュルク族との関係を示す史料は非常に多く見つかっており、それ以前から接触があったことを示唆するようにも見える。いずれにしてもソグド人と 6 世紀後半の突厥との密接な関係は、他鉢可汗（在位 572-581）の死後に作られた所謂ブグト碑文がソグド語で書かれていることから明らかである。ソグド語の言語学的研究の見地からは、このような人的な交流が、どのような形で言語に反映されたかが興味深い問題である。³しかし確実にこの時代に属すると言えるソグド語資料はわずかで、現在までのところブグト碑文、580 年に作られた史君墓の墓誌、新疆ウイグル自治区の昭蘇県で発見された石人の銘文の 3 点しか知られていない。

1-1 昭蘇県の石人銘文をめぐって

新疆ウイグル自治区昭蘇県の石人銘文は、西突厥の泥利可汗の死後に作られたことが明にされている。碑文には泥利のネズミの年（604 年）の死が言及されているように見えるので、その直後にこの碑文は作られたのであろう。最近になってこの碑文を研究した E. de la Vaissière は、碑文に記された彼の即位の年である卯年は 595 年に当たり、その年に即位を告げる使者を東ローマ帝国の Mauritius 帝（582-602）に送った突厥の可汗こそが泥利であると論証した。⁴興味深いのは即位を意味するソグド語の表現が x'γ'n n'ysty「（原義）可汗として座る」になっていることで、これはウイグル語の表現 qaγ'an olur にぴったり対応し、突厥語のカルクであった可能性がある。⁵

2 このできごとは、諸書に言及されている。たとえば E. de la Vaissière, J. Ward tr., *Sogdian traders. A history*, Leiden 2005, pp. 204-205 を参照せよ。

3 北周の大象元年（579）年に死んだソグド人安伽の石棺床囲屏のレリーフには、ソグド人と突厥人が会話しているシーンを描いたレリーフがあり興味深い。（図 1 参照）出典は陝西省考古研究所（編著）『西安北周安伽墓』北京 2003、図 24。このレリーフでは、ユルトの中で長髪の突厥人と、独特の帽子をかぶったソグド人の薩宝が酒を酌み交わしている。指を立てるポーズは、当該の人物が話していることを示しているのだろう。

4 Cf. de la Vaissière, "Maurice et le qaghan: à propos de la digression de Théophylacte Simocatta sur les Turcs", *Revue des Études Byzantines* 68, 2010, pp. 219-224.

5 この読みは、de la Vaissière 氏の依頼でこの銘文を読み直していた N. Sims-Williams 教授と筆者が独立に到達した読みであった。x'γ'n nyδ に関しては Y. Yoshida, "Turco-Sogdian features", in:

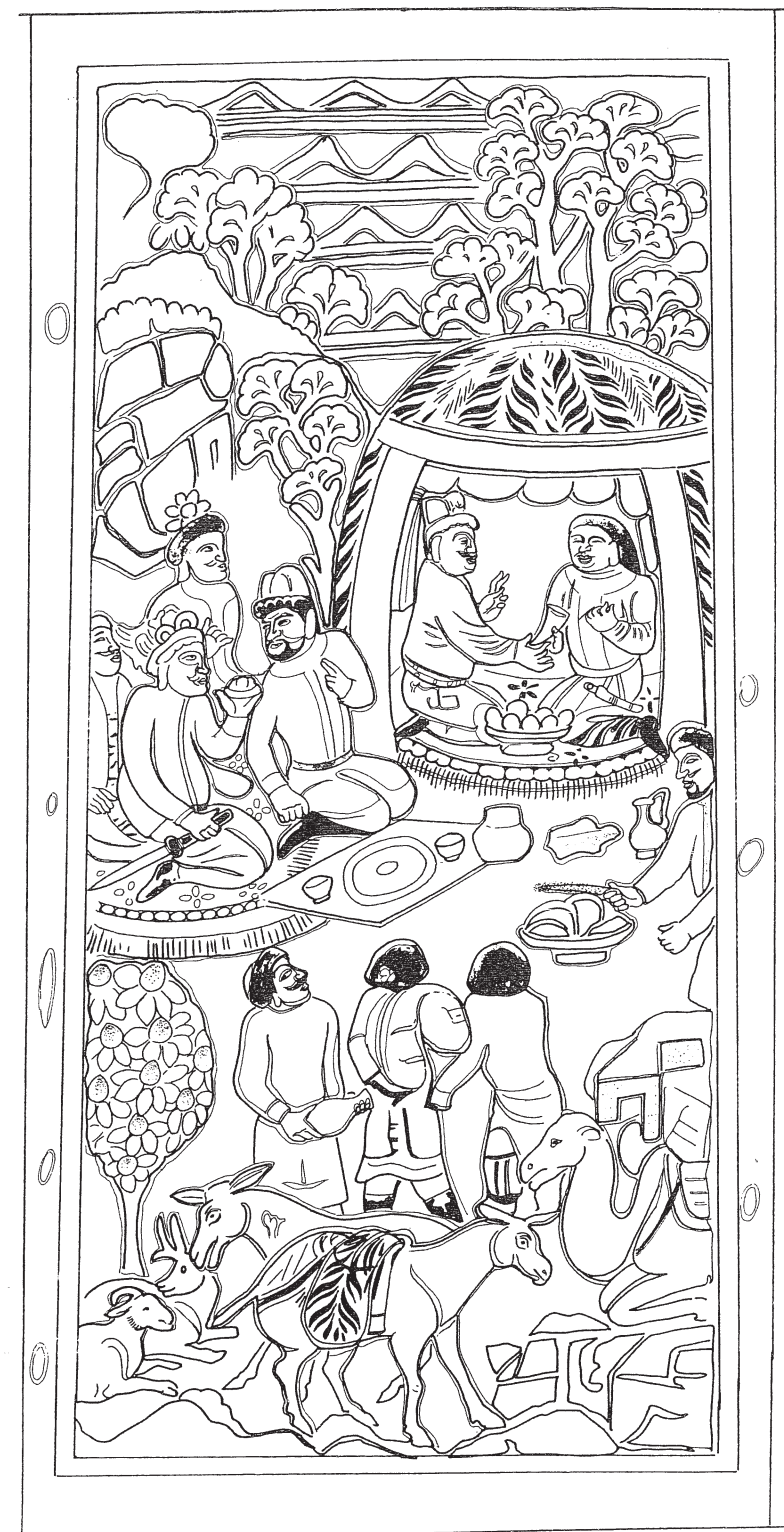


図 1

ここで、参考のためにこの表現を含む 6- 7 行目を引用する。

6 mwx'n x'γ'n npyšn βγy('yr)-p'y nry x'γ'n

7 pr xrγwšk srδy mz'yx x'γ'n n'(ys)ty rtšy(?)xwty

「ムカン(木杆)可汗の孫である乙毘泥利可汗がウサギの年に可汗として即位した。
そして自ら彼の・・・」

6 行目の nry x'γ'n「泥利可汗」に先行する 'yr-p'y の読みは確定しない。de la Vaissière は(cwr)-p'y と読んでいる。筆者は仮にこう読んで、西突厥の可汗の名称にしばしば現れる「乙毘(中古音 *iēt b'ji)」と比較してみた。⁶ただ乙毘の原語は知られていない。

ところで、泥利の即位を東ローマ帝国の宮廷に伝えた使者は誰であったろうか。むろん名前は知られていない。これより 30 年ほど前に西突厥の Dizaboulos (= イステミ可汗?) が東ローマに派遣した使者は Maniakhs という名前のソグド人であった。このことから泥利の使者もソグド人であったと考えられる。しかもその国書はソグド語で書かれていたと推定することができる。⁷それは使者が伝えた次のような内容のメッセージから判明する。de la Vaissière の論文からギリシア語原文とフランス語訳を引用する。

τῷ βασιλεῖ τῶν Ῥωμαίων ὁ Χαγάνος ὁ μέγας δεσπότης ἑπτὰ γενεῶν καὶ κύριος κλιμάτων τῆς οἰκουμένης ἑπτὰ “au roi des Romains, le Qaghan, le grand seigneur des sept races et le maître des sept régions du monde.”

W. Sundermann et al. (eds.), *Exegisti monumenta. Festschrift in honour of N. Sims-Williams*, Wiesbaden, 2009, p. 573 参照。無論 x'γ'n nyδ-/nyst-はソグド語としても必ずしも不自然ではなく、qaγ'an olur のカルクであったかどうかは明らかではない。しかし今後注目すべき現象として注意を喚起した。

6 漢字の中古音は、B. Karlgren, *Grammata serica recensa*, Stockholm, 1957 から引用した。乙毘で始まる西突厥の可汗の名前は、E. Chavannes, *Documents sur les Tou-kiue (Turcs) occidentaux*, Paris 1903, p. 331 で見ることができる。

7 Maniakhs が携えていた「スキタイ文字」の国書が、実際にはソグド文字であったことについては de la Vaissière (上記注 2)、pp. 202-203 参照。

「(ムカン可汗は)人民と[……]七州(=全世界)を支配し、国民を良く養った。そしてまた今、あなた様、神のごときマガ・タトバル可汗は、七州をそれと同じように支配し、国民を養え。さて……」

– 5 –

1-2 ブグト碑文に見える称号 xwrɣ'pcyn について

ブグト碑文を引用したこの機会に、この碑文で新たに読みが確定した称号について報告したい。碑文の B2 面の第 2 行は次のように読むことができる。

[ʷr-kwp-r cr-"](c)w mɣ' t(')[tp'r x'ɣ'n ? tk'yn]t š'δp-y-t tr-xw-'nt xwr-x'p-cy-nt
tw-δwnt +(wny)[t?]

「[ウルクバル・チュラー] チュ・タ [トパル可汗 (に?)、王子] たち、シャダピット
たち、タルクワンたち、クルガプチンたち、トドンたち、[···] たちは [申
し上げた。]」

文脈からここには、ムカン可汗が死んだ後、タトパルが可汗に即位するように奏上する突厥の臣下たちの称号が並んでいることは明らかである。類似のリストは B2, 11-12 行にも見える。これらの称号は既に Kljaštornyj and Livšic (「上掲論文」 pp. 89-90) が分析している。このうち筆者が xwrɣ'pcyn (-t は複数形の語尾) と読む語を、彼らは ɣwrɣ'p'yn と読む。そして qur/qor + qap'n と分析し、トルコ語 (及びモンゴル語) の語源を想定して「ガードル (あるいは、矢筒) を持つ者」と解釈している。¹¹

筆者の読みは筆者らが作成した拓本にもとづくものだが、こちらの読みが正しいことは次のような事実から確認される。この時代の漢文史料を検索すると、この称号を漢字で音写したものが 2 件見つかる。一つは『北史』「突厥伝」の記事で、585 年に沙鉢略可汗の使者として隋の朝廷に来た、可汗の第七子の臣下の窟合真 (中古音 *k'uət ɣâp tsien) である。この名称は『隋書』の「突厥伝」では窟含真 (中古音 *k'uət ɣâm tsien) に作り、山田信夫はその読みをとっている。また『隋書』巻一、帝紀の開皇五年の条では庫合真 (中古音 *k'uo ɣâp tsien) となっている。¹²「合」と

唐朝に送った手紙がある。これについては『内陸アジア言語の研究』15, 2000, pp. 164-165 にある吉田のノートを参照せよ。

11 この時代はソグド文字の ɣ と x を区別せず一様に ɣ で翻字していたので、筆者との読みの違いは、彼らが ' (アレフ) と読んだ文字を筆者が c と読んでいることだけである。

12 これらの事柄に関しては『騎馬民族史 2』(平凡社 東洋文庫 223)、東京 1972, pp. 52, 81 を参照せよ。

「含」では、両者の字形が似ているのでどちらかが誤写であり、この場合『隋書』「突厥伝」の形式のほうが誤っていると考えられる。二つめは、吐魯番出土の漢文文書中に記録された、麹氏高昌国に派遣された西突厥の使者のリストなかに見られる。荒川正晴の研究に従うと 583 ~ 587 年に派遣された使者の中には「呼典枯合振（中古音 *xuo tien k'uo ɣâp tsjen）」と呼ばれる者がいる。¹³「呼典」はソグド語の xwt'yn「王妃」の音写であるから、「枯合振」は独立した要素である。おそらく王妃、すなわち西突厥の可敦（吐魯番出土文書では「珂頓」と表記される）の臣下であったのだろう。

二つの音写語はどちらもソグド文字で表記した xwrx'pcyn にぴったりと対応するので、筆者の読みが支持される。ただこの時代に漢語の有声摩擦音 *ɣ- はまだ無声化していなかったと考えられるので、実際には xwrɣ'pcyn [xurɣapčɪn] と読むのが正しいであろう。かつて A. Boodberg が集めた鮮卑語の資料のなかに、比徳真、庫仁真、胡洛真などの「真」、すなわち職業名を表す接尾辞 -čɪn で終わる称号が数多くあり、xwrx'pcyn 自体はこの -čɪn という接尾辞をとまなう鮮卑の称号に由来したのであるが、それ以上のことは分らない。¹⁴

2 カラバルガスン碑文のソグド語版の 2・3 の読みについて

2-1 資料と研究の歴史

モンゴル高原にあったウイグル可汗国の国都の遺跡、カラバルガスンでみつかったいわゆるカラバルガスン碑文の歴史的な意義については贅言を要しないであろう。¹⁵

13 荒川正晴「遊牧国家とオアシス国家の共生関係」『東洋史研究』67/2, 2008, p. 41 参照。なおこの論文は最近出版された著書に再録されているが、そこでは既に筆者の発見に言及してある。荒川正晴『ユーラシアの交通・交易と唐帝国』名古屋 2010, p. 74 参照。

14 P. A. Boodberg, "The language of the T'o-Pa Wei", *Harvard journal of Asiatic studies* 1, 1936, pp. 167-185 参照。（Boodberg の研究の存在を教示くださった大阪大学の森安孝夫教授に感謝する。）荒川の研究には別に 637 年の記事に現れる「好延枯騰振（中古音 *xâu ɿn k'uo lâp tsjen）」が見える、cf.「上掲論文」p. 42。これは「呼典枯合振」と微妙によく似ていて同じ称号かも知れない。なおこの同じ語は、最近紹介された別の漢文断片にも現れる。銭伯泉「两件吐魯番出土文書紹介与研究」『新疆文物』2009/2, pp. 49-53 参照。

15 *Encyclopaedia Iranica* に掲載予定の筆者執筆の項目 "Karabalgasun Inscription" も参照されたい。現在はホームページ上で電子的に公開されている：<http://www.iranica.com/articles/karabalgasun-the-inscription>.

ルーン文字ウイグル語、漢文、ソグド語の3言語を併用するこの碑文は、ウイグルの8代保義可汗（在位 808~821）の紀功文ではあるが、彼以前のウイグルの歴史について漢文史料には見えない記事を含み、きわめて貴重である。ウイグルがマニ教を国教とした経緯がこの碑文にだけ記されていることはその最も有名な事例である。しかしながら保存状態は劣悪で、ウイグル語版に至ってはわずかに数語を残す断片が数点残っているだけで、文脈を推定することは不可能である。残りの二つはそれと比較すればよく残っている。筆者と森安孝夫の研究により、漢文版が1行90字から成り立っていたことが明らかになり、復元すると碑文の本体だけで高さ4メートル、幅180センチメートルほどの巨大なものであったことが判明している。¹⁶ 漢文版の推定復元から、この最もよく残っている漢文版ですら、現在見ることができるのは全体の半分はおろか3分の1ほどに過ぎないと推定される。とりわけ8代可汗の事績を記録した後半部の大半が破損している。ソグド語はその漢文版よりもさらに破損が大きい。

本稿では、最近新たに読み取ることができるようになったソグド語版の部分のうち、歴史的に興味深い箇所をいくつか紹介する。¹⁷

筆者の読みを提出する前に、研究史について簡単に触れておく。碑文は1889年に発見され、ソグド語版は、はやくも1891年にはRadloffが一部を引用している。しかし当時まだソグド語の存在は知られておらず、彼自身は引用した箇所をウイグル語として解釈しようとしている。言語がソグド語であることを最初に発見したのはF. W. K. Müllerで、1909年に発表した論文で、碑文のいくつかの箇所の読みと解釈を提示した。その後1930年になってようやく全体の読みがO. Hansenの解説によって公刊された。保存状態が劣悪で拓本からの読みは困難を極め、1939年に発表された論文の中で、W. B. Henningが19行目の一部の読みを改善した以外には、Hansenのテキストは長い間改訂されないままであった。1988年になって筆者は、全面的な改

16 共同研究の成果である碑文の漢文面の新しいテキストは、森安の研究の中で発表されている：森安孝夫「コレージュ＝ド＝フランス講演録 ウイグル＝マニ教史特別講義」『シルクロードと世界史』大阪2003, pp. 59-62, figs. 1-2 参照。

17 これは、2010年12月にイスタンブールで行われた国際学会で行うはずであった筆者の研究発表“Some new readings in the Sogdian version of the Karabalgasun Inscription”に手を加えて日本語にしたものである。諸般の事情から急遽参加を見合わせた。学会ではN. Sims-Williams教授が筆者の発表原稿を代読された。

訂版を提出した。この間には J. Hamilton が独自に銘文の研究をすすめていた。彼は、1909 年に B. de Lacoste がフランスに持ち帰った碑文の拓本（実際には厚紙を碑文面に押し当てたもので、estampage と呼ばれる）の一部を 1950 年代にパリで再発見しており、それ等を利用して研究していたが、1980 年代以降はソグド語の専門家である N. Sims-Williams の協力を仰ぎながら改訂の作業を行っていた。そして 1990 年に彼の研究成果の一部を公表した。¹⁸

1994 年に森安孝夫はカラバルガスン遺跡で碑文を調査し、従来は別の断片であると考えられていた Hansen のテキストの Fragment 7 と Fragment 9 およびウイグル語の 1 断片が実は一つの石の 3 つの面に対応していることを発見した。¹⁹ これによって、筆者と Hamilton が推定した復元案を改める必要があることがわかった。1997 年に森安が率い筆者も加わっていた調査隊は、現地に残された碑石を調査するとともに、拓本を作成した。当時、漢文を含む碑文断片のうちいくつかは現地に存在せず、モンゴル側の関係者に尋ねたが所在不明だと言うことであった。従って我々が採拓し得たのは Radloff が出版した拓本と比べるとかなり少ない。²⁰ 我々が作成した拓本については 1999 年の報告書（森安・オチル編，pp. 209-224）でテキストと日本語の翻訳を発表した。その時点で筆者は Sims-Williams 教授と故 Hamilton 教授から、彼らが準備していたソグド語版のテキストの草稿を提供してもらっていた。彼らは de Lacoste

18 これらの研究を時系列で配列しておく：W. W. Radloff, *Das Kudatku Bilik des Jusuf Chass-Hadschib aus Bäläsagun*. Teil 1., St. Petersburg 1891, p. LXXXV; F. W. K. Müller, “Ein iranisches Sprachdenkmal aus der nördlichen Mongolei”, *Sitzungsberichte der Preußischen Akademie der Wissenschaften, Phil.-hist. Klasse* 1909, pp. 726-730; O. Hansen, “Zur soghdischen Inschrift auf dem dreisprachigen Denkmal von Karabalgasun,” *Journal de la Société Finno-Ougrienne* 44/3, 1930; W. B. Henning, “Argi and the ‘Tocharians’”, *BSOS* 9, pp. 545-571（特に p. 550）；吉田豊「カラバルガスン碑文のソグド語版について」『西南アジア研究』No. 28, 1988, pp. 24-52; idem, “Some new readings of the Sogdian version of the Karabalgasun Inscription”, in: A. Haneda (ed.), *Documents et archives provenant de l’Asie Centrale*, Kyoto 1990, pp. 117-123; J. Hamilton, “L’inscription trilingue de Qara Balgasun d’après les estampages de Bouillane de Lacoste”, in: A. Haneda (前掲書), pp. 125-133.

19 このウイグル語面の拓本は Radloff, *Die alttürkischen Inschriften der Mongolei*, 3. Lieferung, St. Petersburg 1895 の plate XXXV-6 に当たる。なお、森安によるこの重要な発見は、いち早く吉田豊『オリエント』37/2, 1995, p. 28 において報告されている。

20 Radloff の図版（上記注 19 参照）に収録された碑石断片と森安隊が採拓した断片との比較には、森安孝夫・オチル編（上記注 8 参照）の plates 14b-14g が便利である。

の拓本や筆者の1988年のテキストも参考にしながらテキストと翻訳を作成していた。それは、予想されるとおり筆者のものを大幅に改善しており、極めて優れたものであった。それをもとに日本側（森安と吉田）フランス側（Hamilton）が共同で研究を発表すべく、準備を進めていた。その間の2003年5月には日本側の二人が、碑文の内容について Collège de France で講義を行い、筆者は Sims-Williams と Hamilton が作成したソグド語版のテキストをさらに改訂し、英語による翻訳を添えて講義資料として受講者に配布した。また森安は、筆者と共同で作成した漢文版のテキストを配布した。こちらのほうは森安の2003年の出版物（上記注16参照）に Figs. 1, 2 として添えられている。ただ日仏の共同研究の計画は、2003年の Hamilton 教授の突然の死によって実現できなくなり、現在は森安と吉田が少しずつ研究を進めている状況である。そんな中で筆者は最近、*Encyclopaedia Iranica* のために Karabalgasun 碑文のテキストの項目を執筆したが、その際幾つかの新しい読みを発見することができた。ここではそれらの内で歴史的に見て興味深い箇所を2・3紹介する。

この項の最後に、碑文の利用できる写真について説明しておく。銘文を読むためには、拓本ないしは写真が必要になる。現在一般に利用できるのは、Radloff が出版したロシア所蔵の拓本の写真と Heikel の写真である。²¹ ただしこの写真から文字を読み取るとは実際上不可能で、拓本からの読みを確認するときにかろうじて利用できる程度である。森安孝夫をリーダーとする調査隊が採拓した拓本は、大阪大学のホームページで閲覧することができる。²² 上でも述べたように、ここで見ることはできるのは1997年の段階で現地に残っていた石のみである。ラドロフの拓本と比べると全体として状態は悪くなっている。100年ほどの間屋外に放置されていたことが主な原因であろう。筆者はこの他に、京都大学と立命館大学が分蔵する拓本を利用した。これは羽田亨が漢文版を校訂するときに利用したと言っているものの一つで、「盛京省副都統たりし三多氏が蒙古に在住中、人をして作らしめたる拓本」と述べているものである。本来京都大学東洋史研究室が所蔵したはずであるが、断片のほうの拓本だ

21 A. Heikel, "Les monuments près de l'Orkhon", in: Société Finno-Ougrienne, *Inscription de l'Orkhon*, Helsinki 1892, pp. VII-XIII, Tabellen 44-63. ロシアの拓本は Radloff の著書（上記注19）に複製されている。

22 <https://www.museum.osaka-u.ac.jp/~InfoLib-ROOT-/meta/MetSearch.cgi>

けが現在立命館大学に保管されているようになった経緯を筆者は知らない。²³ 筆者は Hamilton が利用した de Lacoste の estampage も調査した。筆者が調査した 2003 年 5 月の時点では、それはパリの Société Asiatique の図書館に保管されていた。この estampage については、故 Hamilton 教授が撮影したビデオから焼き付けた写真も提供された。このビデオと写真は、読みが特に困難な部分だけしか写していない。

2-2 3 言語版の相互関係

最初にカラバルガスン碑文の解説の進展を示すために、Radloff が最初に解説を試みた箇所をその後の研究者がどう読んでいるかみてみよう。

Line 2 / Fragment 5

Radloff 1891: pylksww yynync “anerkend Ini[n]tch (Mökö Tegin)”

Müller 1909: np'γštw δ'rnt “haben es geschrieben”

Hansen 1930: np'γštw δ'rym “haben wir gesetzt”(sic)

Yoshida 1988: np'xštw δ'rym 「我々は書いた」

ここから分かるように Hansen 以降、この部分に関する読みは確定している。

ウイグル語版はほとんど残っていないが、碑額は例外である。スペースから換算して横書きで 9 行あったらしいが、そのうちの 5 行が残っている。ただしどの行でも初めの 1 字は破損している。漢文版とソグド語版では、碑額のなかの文字はわずかな痕跡が見えるだけである。しかしその痕跡から、各々の版の冒頭の行と同じであることが分かるので、3 つを比較することができる。

Uighur: bu tängrikän [ay] tängriḡä qut bulmīs alp bilgä tängri uyyur qayan [...]
bitidimiz]

「この主君 Ay Tängriḡä Qut Bulmīš Alp Bilgä という（称号の）神なるウイグル

23『羽田博士史学論文集 上巻歴史篇』京都 1957, p. 310 参照。京都大学と立命館大学での分蔵状況は森安・オチル編 plates 14h-i で図示されている。

の可汗 [を讃える碑文を ///// 我々は書いた]。』²⁴

Chinese: 九姓迴鶻愛登里囉汨没蜜施合毘伽可汗聖文神武碑并序

Sogdian: 'yny "y tnkry-δ' xwtpwl-mys 'l-p pyl-k' βγy 'wyγwr x'γ'-n γwβty-'kh
pts'k np'x(š)[tw δ'rym]「この Ay Tāngridä Qut Bulmīš Alp Bilgä という神のご
ときウイグルの可汗を讃える碑文 (?) を、[我々は] 書いた。」

ともに「この」で始まるなど、一見してソグド語版とウイグル語版は並行する表現であったことが分かる。つまり一方は他方をベースにして作成されたと考えられる。それに対して漢文はそれらとは独立していて、漢文独自の伝統的なスタイルに則って書かれている。これと関連して想起されるのは、ウイグルの第2代可汗（在位 747-759）のいわゆるシネ＝ウス碑文の中の、西面の有名な一節である。

W5: suγdaq tavγačqa sālāñädä bay baliq yapiti bertim “I had Bay-Baliq built on the Sālāñä for the Sogdians and Chinese”²⁵

この一節から、ウイグルの可汗が定住民族であるソグド人と漢人を都市に住まわせたことが知られると同時に、この2民族が技術者および書記集団として利用されていたことが推測できる。もし漢人とソグド人の二つの書記集団を想定できるなら、ウイグル語版はソグド人によって起草された可能性が高いであろう。いずれにしても漢文版とソグド語版は、互いに独立して起草されており、両者には直接的な依存関係はなかったようである。つまりソグド語版で破損した部分を補うときに、対応する漢文版を安易に利用することはできないことになる。

実際碑文の冒頭部は漢文版でもソグド語版でも相対的によく保存されているが、両者がどのように対応しているのかよく分からない。漢文版では、上で引用したタイトルの直後に5字分の空格がつづき、その後で、内宰相頡于伽思葉羅訖 [破損部] が続く。これは行の始まりから数えて30文字目から39文字目にあたる。その後は破損してい

²⁴ テキストと翻訳は森安のそれである。森安・オチル編、p. 219 参照。

²⁵ 森安孝夫他「シネウス碑文訳注」『内陸アジア言語の研究』24, 2009, pp. 20, 31 参照。

Yoshida 2010: (3) BLANK (ny-)’k (’)[l- (4) |p(yn’nc)w p(γ)’trx’n?

(5) 1(++) mwn'kw ms βγ(pwr'k) np[ʔyk? 1

これまでの研究で提出された読みを便宜のために並べて比較する。Yoshida 2010 は、本稿で筆者が提案する読みである。翻訳はそのテキストを和訳している。NSW/JH は、上で言及した Sims-Williams と Hamilton が共同で作成した未公開のテキストである。ただしこれは彼らが出版を意図して責任をもって提出したテキストではなく、あくまでも最終的な解読のための一作業段階に過ぎない。敢えてここに引用したのは、これを批判して訂正するためではなく、筆者の新しい読みがどれほど彼らの読みを参考にしているかを示すためである。

– 13 –

ことを記録する箇所、中国のことを $\beta\gamma pwrstnw$ と呼んでいることも参考になる。²⁶ これもまた NSW/JH の読みであり、1988 年の段階で筆者は読むことができなかった。つまり $\beta\gamma pwr'k$ はむしろ「中国の」を意味した可能性が高い。それではなぜ碑文のこの場所で「中国の」という表現が使われたのか？ 現段階で筆者はその後 $np[yk]$ 「書き物、文」を補って、中国語版を作成したことを書こうとしたのではないかと推定している。筆者は先行する部分を $(ny-)'k$ $(')l-p(yn'nc)w p(\gamma)['trx'](n)$ 「祖父(?) 合伊難主莫何達干」と補うが、それが正しければ、この人物は中国語版を作成した責任者ということになるだろう。そして漢文版の 1 行目に現れる同名の高官は同じ人物に違いない。筆者はさらに一步進めて、『新唐書』の「回鶻伝」の 811 年の記事に、唐に使いとしてやって来たとされる伊難珠と同一の人物ではないかと考えている。²⁷ 彼は中国通で、漢文版の作成に当たって総責任者になったのではないだろうか。

筆者の第 1 行目のこの部分の読みと解釈はまったくの仮説に過ぎないが、ソグド語版の文字を読み、内容を理解することの難しさの一端が伝わったのではないと思う。これから後は比較的に確実な読みが新しく見つかった箇所についての報告である。

2-3 中央アジアの政治史

突厥第二可汗国の末期 740 年代に、ウイグルは、カルルクおよびバスミールと連合して、突厥を打倒した。そしてすぐ後にウイグルはカルルクとバスミールを破って漠北の覇者になった。この間の事情は漢文版の 5 行目、ソグド語版の 6 行目に記されている。ソグド語版は次のように読むことができる。

26 この語の意味については、敦煌出土のソグド語仏典 Pelliot sogdien 8、の 166 行目に見える $'my \beta\gamma p'wr-stny 'kw \delta rw'nckn\delta yh$ 「中国（原義：天子の国）の敦煌で」も参考になる。この仏典のテキストは E. Benveniste, *Textes sogdiens*, Paris 1940, p. 113 で見ることができる。 $\beta\gamma pwrstn$ の解釈については Henning, *BSOAS* 11/4, 1946, p. 736 を参照せよ。Henning はそこで、Pelliot sogdien 8 の時代には、「古代書簡」（4 世紀初め）で使われていた $cynstn$ 「中国」は廃用されていたのだろとうとしている。

27 『旧唐書』では 813 年。『騎馬民族史 2』pp. 348, 408（上記注 12）参照。筆者の $(ny-)'k$ 「祖父」の読みが正しいか全く確信がない。およそ $-k$ の前に文字があったかどうかとも判然としない。もし $ny'k$ が字義通り「祖父」を意味すれば、筆者の読みは成り立たない。しかしこれが「大叔父」を表すと考えれば必ずしも不合理な解釈ではないと思う。あるいは $(n\beta\gamma r)'k$ 「忠告者、相談役、大臣」とよむべきだろうか。

Line 6

- Hansen (1) p.c'w ny δ(')s('nš) krtty 't'yt
 Yoshida 1988 (1) p(.)c'w ZY "š(n')š ktyty (t.....) '(.)st(.)k
 NSW / JH (1) *p(c')'w ZY *("x'ns) k(r)ty twr(k) 'xš'wnδ'r '(')st('n)t
 Yoshida 2010 (1) p(r')'w ZY "šn's knty twr(k) 'xš'wnδ'r '(')st('n)t

... ty 'γš'wnδ'rt 'krt'nt k m'.. 'γšywny βγtw δ'rt .w... γ. //////////////
 (...)ty 'xš'wnδ'rt (')krt'nt k(.....m'...) 'xš'w('nh) z-γtw δ('r'n)t (.....) [
 xwty 'xš'wnδ'rt 'krt'nt ky++ m(')δ 'xš'w('nh) z-γtw δ'r('n)t (y)w(')r (β)γtw
 xwty 'xš'wnδ'rt 'krt'nt kyZY m(y)δ 'xš'w('nh) z-γtw δ'r('n)t (y)w(')r (β)xt(w)[n-

- (2) wym't cywyδ . //////(4)]. ... γ . t δrwtykw .. t t //
 (2)](.) wm't (cywy)δ (....)[(4)]('xš'w'n)h δβtykw "y-tδ('r'n)t []
 (2) wm't cy-wyδ 'xš'[wn(4)]('xš'w'n)h δ(β)tykw "y-tδ('r'n)t ZY[]
 (2)](y) wm't cy-wyδ 'xš'[wnδ'rty(4)]('xš'w'n)h δ(β)tykw 'y-tδ('r'n)t ZY[]

(1) ... [カルルクおよびバスミール] とともに、アシナス族の突厥の支配者を捕
 まえ自らが支配者になり、この領土を保持した。しかし分裂(2)が起こり、その
 支配者たちから再び領土を取り上げた。」

"šn's knty twrk 「アシナス族の突厥」とは阿史那姓の突厥という意味に違いない。そ
 して "šn's は漢文史料の阿史那の原語である。この語はブグト碑文にも現れ、そのこ
 とは既に以前に指摘した。²⁸ 最近になって大澤孝は、ルーン文字碑文にもこの名前が
 šns という表記で在証されることを発見し、筆者の説を補強している (『内陸アジア

28 森安・吉田『内陸アジア言語の研究』13, 1998, pp. 154-155 参照。ただしそこで引用したカラバ
 ルガスン碑文の読みには、一部改善を要する部分があり、今後は本論文から引用されたい。なお
 Collège de France の講義では、Chavannes, "Notes additionnelles ..." pp. 20-21 (上記注6) に言
 及して、阿史那の原語がイスラム史料にも現れる事を指摘した。イスラム史料については P. B.
 Lurje, *Personal names in Sogdian texts*, Vienna, 2010, p. 74 も参照せよ。

言語の研究』25, 2010, pp. 50-56)。しかるに Ch. Beckwith は筆者の読みと解釈を全面的に否定し、独自の解釈を展開している。²⁹ 彼の説はあまりに荒唐無稽で、敢えて批判するにも及ばない。今回筆者は、断片 1 から 2 にかけて $\beta x t(w)[n](y)$ 「分裂」と補うことによって、ソグド語版が漢文史料から知られていた歴史状況にぴったり合う内容になっていることを明らかにできた。

ウイグル史のなかのもう一つの重要な事件は、支配部族がヤグラカル氏からエディズ氏に代わったことであろう。すなわち第 7 代の懐信可汗(在位 795-808)は本来エディズ氏の出身であったが、家臣であった時代に対チベット戦で功績をおさめ、ヤグラカル氏出身の可汗の跡目争いでウイグル宮廷が混乱したときに可汗の位に就いた。この間の事情はソグド語版では 16 行目に記されている。漢文版では 11 行目に 6 代可汗から 7 代可汗への継承記事があるが、その直後に 8 代可汗の名前も出てくるので、従来から漢文版の 12 行目以降の記事がどちらの可汗に関わるのかについては論争があり決着がついていない。この問題はそこに 2 文字分の空格を伴って現れる天可汗がどちらを指すかとも密接に関わっていて、一般には天可汗問題とも呼ばれる。³⁰ 筆者自身は一貫して 7 代可汗を指すと考えているが、ここでは特にその点について議論しない。ソグド語版の 16 行目の該当箇所を見てみよう。

Line 16

Hansen (1) $\gamma y \dots //kw mwn'kw ptškw't pt \dots 'nt ny pr s't$

Yoshida 1988 (1) $[.....]kw mwn'kw ptškw'nh pty-(sy)nt ZY pr s't$

NSW / JH (1) $cn[m'ny +]ykw mwn'kw ptškw'nh pty-(sy)nt ZY pr s't$

Yoshida 2010 (1) $[\quad c'](n)kw mwn'kw ptškw'nh pty-(sy)nt ZY pr s't$

$pwrn\beta\gamma ty \gamma wyštr 'yr 'wk'sy 'r-pw \gamma wtr-w\gamma \dots n'm \delta\beta r$

$p(.....)ty xwy-štr 'yl 'wk'sy 'l-pw xwtl-w\gamma t(.....)n n'm \delta\beta r$

29 Ch. Beckwith, "The Chinese names of the Tibetans, Tabghatch, and Turks", *Archivum Eurasiae Medii Aevi* 14, 2005, pp. 5-20。もちろん大澤も Beckwith 説を批判している。

30 安部健夫『西ウイグル国史の研究』京都 1955, pp. 169-199 に詳しい。安部は天可汗 = 7 代可汗説を支持した。

*pw(rny'n)ty xwy-štr 'yl 'wk'sy 'l-pw xwtl-wγ (t)[wγ ZY] n'm δ'br

pw(yrw)xty xwy-štr 'yl 'wk'sy 'l-pw xwtl-wγ t(yk)'yn n'm δ'br

「彼（＝第6代可汗？）がこの奏上に同意したとき、すべての大臣（buyruq）たちのなかのリーダー格であった者に、Il Ögäsi Alp Qutluγ Tegin という名前を与えた（或いは：リーダー格の相談役（＝il ögäsi）に Alp Qutluγ Tegin という名前（＝称号）を与えた）。」

Hansen の pwrnβγty の読みからも推測できる通り、碑文ではこの部分は比較的によく文字が残っていた。しかし文脈に合致する読みを見つけることができなかった。このことは NSW/JH の米印付きの読みによく反映されている。今回ここにソグド語の複数形の語尾を伴うウイグル語の称号 buyruq を読むことができたおかげで、即位前の7代可汗が buyruq「大臣」の一人であったことが明らかになった。そして彼に tegin「可汗の息子」の名前・称号が与えられたことが判明し、形式上はヤグラカル氏の養子になったことが推測される。『新唐書』の「回鶻伝」ではこの間の事情を次のように記している。

至是、以葉羅葛氏世有功、不敢自名其族、而盡取可汗子孫內之朝廷

「このようにして[可汗となった骨咄祿（＝懷信可汗）は]葉羅葛氏が代々の功績があったことにかんがみて、あえて自分の姓[跣跣]を名のらず、[葉羅葛氏を名のり]、そして[天親]可汗[以前]の子孫をことごとく召し取って、これらを[唐の]朝廷に奉納した。」³¹

ちなみに NSW/JH の読みでは筆者が t(yk)'yn n'm δ'br と読むところを、(t)[wγ ZY] n'm δ'br と補って読み、「俸給と名前を与えた」と訳している。twγ を「支払い」という名詞に取ったわけである。このように補った理由は、彼らがこの碑文の20行目に、twγ ZY n'm δ'br という確実な組み合わせを読み取ることができたからであった。ここでその箇所を見てみよう。

31 中華書局本 p. 6126；『騎馬民族史2』p. 407 参照。

Line 20

Hansen (1) 'krtw δ'rt / /yh ptwyst... s'rβ'γty 'r.rkr 'r-pw ...cw

Yoshida 1988 (1) [(k)rtw δ'rt (____)kh pt(βy)st'y s'rβ'γty 'nβr(z)-kry 'l-pw (yn)cw

NSW / JH (1) (')krtw δ'rt +[++]+ CWRH *ptw(')sty (xrl-w)γty 'nβr(z)-kry 'l-pw yncw

Yoshida 2010 (1) (')krtw δ'rt (x)[wt]y CWRH ptw(y)sty xrl-wγty 'nβr(z)-kr 'l-pw yncw

pyr-k' ypγw n...δ t..(w.n)y n'm δβr ny m... st'rk t... // (2)s γw(r) γ'γ-n

pyl-k' ypγw nyšyδ t(____)y n'm δβr ZY m'x(.) 'st'rk (t)[(2)](š) x(w)β x'γ-n

pyl-k' ypγw nyšyδ twγ ZY n'm δβr ZY *m(')δ (')'st(r)k tw[rk(2)y]š x(w)β x'γ-n

pyl-k' ypγw nyšyδ twγ ZY n'm δβr ZY m(yδ) (')'st(ny)k tw[rk(2)y]š x(w)β x'γ-n

ky pr δst p...y twrkyš 'γšwnδ'r wm't ny ...

ky pr δ(s)' p'δ 'δry twrkyš 'xšw'nδ'r wm't ZY ...

ky pr δs' p'δ 'δry twrkyš 'xšw'nδ'r wm't ZY ...

ky pr δs' p'δ 'δry twrkyš 'xšw'nδ'r wm't ZY ...

「・・・にした。自ら我が身を差し出してきたカルルクたちのお目付役として
Alp Yinčü Bilgä 葉護を据え（＝任命し）、纛と名前（＝称号）をあたえた。そして
この十の矢の三姓トルギシュの支配者であった本来のトルギシュの領主である
可汗を・・・」

この文脈の twγ は、明らかに纛（中古漢語 *d'uok）からの借用語である。この語はウイグル語文献に見られ、Clouston は “a royal emblem” と翻訳している。³² カラバルガスン碑文のこの箇所は、当時既にこの語が借用されていたことを示している。

この部分はカルルクを攻めて西部天山地方にウイグルが勢力を伸ばしたとき、降伏してきたカルルクに対する処置と、この地方にカルルクの西遷以前から居住していた

32 Cf. G. Clouston, *An etymological dictionary of pre-thirteenth century Turkish*, Oxford, 1972, p. 464a.

トルギシュの可汗への処置（おそらくもう一度可汗にしたこと）を述べた件であろう。筆者が”stnyk と読んだ語は「本来の」を意味し、西部天山地方の正統な支配者は、西突厥（十姓＝十箭）の流れを汲むトルギシュであるというウイグル側の理解を示す表現として興味深い。漢文版の 21 行目の次のパッセージに対応するのであろう。

復與歸順葛祿册真珠智惠葉護爲主又十箭三姓（突騎施）〔これ以降破損〕

カラバルガスン碑文に含まれる歴史的な事件としては、ウイグルの中央アジア進出と、碑文にも言及されるイスラム勢力との接触の実態の解明が重要であり、興味を惹くところでもある。イスラム史料のなかのウイグルすなわちトクズグズ関連の記事と、カラバルガスン碑文の記事の関連を明らかにすることは今後の課題である。³³ 筆者は同時代のコータン語文書に、チベットとウイグルとの戦いの反映が見られること、チベット側から見たクチャの陥落が 798 年であり、カシュガルでの惨敗が 802 年であったらしいことを論じたことがある。その後、後者の事件を記録したユダヤ・ペルシア語の手紙も見つかった。また最近 Skjærvø は、この時期のコータン語の世俗文書を網羅的に集めて詳しく分析・翻訳している。³⁴

33 吉田 1988 において、当時筆者が把握できた限りでイスラム史料との関連を指摘した。その後 E. de la Vaissière, *Samarcande et Samarra*, Paris 2007, pp. 127-131 には、カラバルガスン碑文の記事とイスラム史料の記事が対照されている。

34 Yoshida, “Karabalgasun Inscription and the Khotanese documents”, in: D. Durkin-Meisterernst, Ch. Reck, and D. Weber (eds.), *Literarische Stoffe und ihre Gestaltung in mitteliranischer Zeit*, Wiesbaden 2009, pp. 349-360; P. O. Skjærvø, “The end of eighth-century Khotan in its texts”, *Journal of Inner Asian arts and archaeology* 3, 2008, pp. 119-144。ユダヤ・ペルシア語の手紙については張湛・時光「一件新發現猶太波斯語信劄的斷代与釈読」『敦煌吐魯番研究』11, 2008, pp. 71-99 参照。

2-4 マニ教の導入

上でも述べたように、カラバルガスン碑文はウイグルがマニ教を国教とした経緯を伝える唯一の資料として有名である。³⁵ ここではマニ教の導入にかかわる二つのパッセージを検討してみよう。まずモンゴル高原のウイグルの領内にマニ教僧侶を連れてきたことを記した箇所を見ることにする。

Line 10

Hansen (1) ... βγy 'γšywny/////////(2) t'kw 'p.y. 'rw

Yoshida 1988 (1) ... βγy ('xšywny)[(2)]t'kw (..)p(..)'rw (.....)

NSW / JH (1) ... βγy 'xš(')y-wny ('rp)[s(2)]t'kw '(s)p'δy (rty) prm('n)

Yoshida 2010 (1) ... βγy 'xš(')y-wny 'M ('rp)[s(2)]t'kw '(s)p'δy pr'γw mδy

twtwk'n/////////(4) "t 'w. . t

(...t.)k'n z-'yh [(4)](.....)"t '(.....)[]

γrβtwk'n z-'yh [(4)](k)pγ p(t)z('n)t "(s)t [...]kw

('w)ytwk'n z-'y(h)[(4)]("γ')z-nt "(γ)t []kw

「神にも似た支配者 (=可汗) は (2- 4) 強力な軍隊とともにここオチュケンの地に [. . .] を連れてき始めた。」

とりわけこの箇所では文字の読みが困難である。そのことは上下に並べた 4 種類のテキストを比べるとよく分かるであろう。しかしその中では、z-'yh「土地、大地」の直前の語は比較的によく残されている。吉田 1988 は意味のある語が読み取れないという理由で、t と k の間の文字や語頭の 3 文字を読んでいないが、Hansen や NSW/JH は読みを提案している。まずこの語が -twk'n で終わっていることは確実である。

35 ちなみに漢文版をもとに、問題になっている宗教がマニ教であることを最初に指摘したのは J. Marquart, "Historische Glossen zu den alttürkischen Inschriften", *Wiener Zeitschrift für die Kunde des Morgenlandes* 12, 1898, pp. 157-200 であった。

またそれに先行する部分でも p, k, δ, m, s のような特徴的な形を持つ文字はない。今回、この語の直前に mδy 「ここ」を読み取れたことによって、その直後の -twk'n で終わる語を 'wytwk'n 「オチュケン」と読むべきであることは明らかになった。ウイグルが首都を置いた現在のカラバルガスンは、オチュケン山の麓、オルコン河流域の遊牧民の聖地であった。その場所に洛陽にいたマニ教僧侶を連れて来たのであった。ウイグルが西遷した後でも、マニ教を守護する神格としてオチュケンの守護霊という表現が現れる。³⁶ なお 'wytwk'n z'yh という組み合わせは、ウイグル語の ötükan yer, ötükan eli などに対応しているであろう。

マニ教を導入するにあたっては、ウイグル国内でもいろいろなきさつがあったようで、碑文の 11-12 行目にはそのことが記されている。そしてそれに続いて以下のような一節が読み取れる。

Line 12 (Fragment 6)

Hansen (6) γsy δr cn'kw rγw wrw.γ k / / /

Yoshida 1988 (6)](.....)δr c'nkW (.....)kh [

NSW / JH (6)]*(')xšy-(wn'kw)(?) c'δr c'nkW βγy ('xšy-wny)(?) (+++)m(w)z-k(')[

Yoshida 2010 (6)] ('sky) ZY c'δr c'nkW βγy (mry) nyw(rw)'n m(w)z-k(')[

「・・・東に西に [マニ教僧侶は往来した]。神にも似た慕闍マール・ネーウルワーンは [それを聞いた] とき [非常に喜んだ?]。」

筆者は 1988 年当時はほとんどどんな語も読み取れなかった。その後 NSW/JH が mwz-k' 「慕闍 (マニ教僧侶の最高位の階級の名称)」という語を読み取っていることを知り、筆者自身がカラバルガスン遺跡で採拓した拓本を詳しく調べてみたところ、直前の部分をほぼ確実に mry nywrw'n と読むことができた。漢文版の 10 行めには

自後__慕闍徒衆、東西循環、往來教化 (__ は空格を示す)

36 たとえば森安 (上記注 16) pp. 54-55 を参照せよ。ウイグル語文献に現れる ötükan については P. Zieme (王丁訳) 「有関摩尼教開教回鶻的一件新史料」『敦煌學輯刊』2009/3, pp. 4-5 も参照せよ。

とあり、筆者が読んだ 'sky ZY c'δr 「上方と下方、東と西」はその「東西」に対応していると考えられる。いずれにしても、ウイグルがマニ教を導入した時期の慕闐はネーウルワーンという法名を持っていたことが推測される。幸いにもこの推測は、森安孝夫のマニ教ウイグル語文書の研究で確実なものになった。森安孝夫は、トルファン出土で現在ベルリンの国立図書館が保管するウイグル語のマニ教文献に、マニ教導入の経緯を記録した文書の断片(Mainz 345)を発見した。この文書は小さな断片であるが、カラバルガスン碑文の対応箇所と並行する記事を含んでおり非常に参考になる。森安はその断片に tngry mr nyw[] 「神なるマール・ネーウ [破損]」と読める箇所があることに気づき、カラバルガスン碑文の筆者の読みと比較することによって、tngry mr nyw[rw'n mwz'k] と破損部を補った。³⁷

奇しくも、最近になって P. Zieme は 1980 年にベゼクリクで出土したマニ教ウイグル語文献に、やはりウイグルがマニ教を導入した経緯を記録した断片があることに気がつき研究を発表している。³⁸ そこには 3 代可汗の名前 bögü xan や moʒak という語が見える。舞台はオルコンで、200 冊の本を西方のマニ教僧侶たちがオルコンに持って来て、それを可汗自らが先頭に立って迎えたとある。使節は twx/ɣwryst'n を経由して来たように書いてある。この地名はカラバルガスン碑文の twɣr'ystny と同じ地名で、西域北道沿いの地域をさす名称である。Hansen 以来この地名は twɣr'k-c'ny のように読まれてきたが、その読みは de Lacoste の estampage や京都大学の拓本、Heikel の写真から支持されない。また語中の -ɣ/x- は、ɣ と読むべきであることは、マニ文字中世ペルシア語資料における表記 twgryst'n から分かる。

37 森安孝夫「ウイグルから見た安史の乱」『内陸アジア言語の研究』17, 2002, pp. 117-170 および、森安（上記注 16）pp. 50-56 を参照せよ。

38 Zieme（上記注 36）参照。驚くべきことにこのベゼクリク出土文書は、ウイグルにおけるマニ教の歴史について書かれているにもかかわらず、遅い時代の草書体の文字で書かれている。通常マニ教ウイグル語文献は、森安が半楷書体と呼ぶ古い書体で書かれているから非常に不思議である。筆者は、この文書はウイグル族が伝承していた民族史を記録した写本の断片ではないかと考えている。ウイグル族がそのような伝承をモンゴル時代まで持っていたことは、安部健夫（上記注 30）が研究したブクハンに関する伝説からも推定される。

3 R. アラト旧蔵のトルファン文書の写真資料 *So 21009

2010年4月の終わりころ、イスタンブールに滞在していた松井太教授（弘前大学）から、R. アラト旧蔵のトルファン文書の写真資料のなかに、ベルリンの国立図書館では原文書が失われた文書の写真が含まれていること、そしてその中に2点ソグド語文書が含まれているという知らせを受けた。数日後には写真も送られてきた。1点は片面に7行を残すソグド語の手紙の断片であった。もう1点はウイグル語とのバイリンガル文書で、表裏に書かれている。手紙文書のほうは後に *So 21009 という番号が与えられ、バイリンガルの文書のほうは *U 9248 という番号が新たにつけられた。ちなみに米印付きのこの番号は、イラン語とウイグル語で書かれたトルファン出土文書を保管するベルリンのトルファン学研究所（Turfanforschung）で、原文書が失われた資料に与えられるものである。³⁹ ここでは、現在アラト旧蔵の写真資料を研究している Osman Fikri Sertkaya 教授の許可を得て、*So 21009 のテキストについての研究を発表するとともに、この種の言語を話した話者に関する社会言語学的な考察を行う。

3-1 文書の特徴と内容

最初にこの手紙の写真を見たときから、この手紙の言語がいわゆる“Turco-Sogdian”であることが分かった。Turco-Sogdian というのは、Sims-Williams が Hamilton と共同で敦煌出土の遅い時期のソグド語の手紙その他の世俗文書を研究したときに、そこに見られる言語に与えた名称である。⁴⁰ ソグド語ではあるが、ウイグル語の要素を多く含んでいる。その多くは人名で、あたかもウイグル語の人名を持った人たちどうしの通信用の手紙であったように見える。それ以外に、ウイグル語の表現を下敷きにしたような表現や構文が見られることももう一つの重要な特徴である。また個々の文字

39 この二つの文書について筆者は、2010年10月にトルファンで開催された学会で、“A new Turco-Sogdian document from the late Professor Arat's photograph collection”と題する研究発表をした。

40 N. Sims-Williams and J. Hamilton, *Documents turco-sogdiens du IX^e-X^e siècle de Touen-houang*, London, 1990 [以下 DTS と略す]。

の判別が困難なほどの草書体で書かれていることも共通している。遅い時期のソグド文字というより、早期のウイグル文字、すなわち森安が半楷書体と呼ぶウイグル文字の早期の書体と見ることもできる。⁴¹ So 21009 の書体も同じで、' と n (そしてときに r も) ; s と š ; β と y は区別できない。さらに、", nn, 'n, などの組み合わせは x/y と区別することが難しい。5 行目の "rxyš「キャラバン」は、この書体の特徴をよく例示している。この語はそれ自体ウイグル語からの借用語であるが、x の上に添えられた補助記号の点は、ソグド文字というよりウイグル文字であることを示唆する。⁴² この種の言語の特徴について最近 Sims-Williams と筆者は互いに独立して研究論文を発表している。⁴³

最初の数行は解釈が難しいが、最後の 3 行の意味は明瞭である。

"rxyš šwy pyδ'r cxyδ'yw ('y)c't'wy n'm'k np'xšt(y) n'wmy m'xw pnc syty' kyw'n z-mnwy'「キャラバンが行くので、一通の健康（を尋ねるため）の手紙が認められた。9 月 5 日土曜日。」

最後の 2 行は行下げがあり、丸い印章が押してある。日付があるこの部分は、文面からも明らかなように手紙の末尾である。手紙のこの部分に丸い朱印を押捺することは、

41 森安のウイグル文字の書体に関する言及は多くそれらを網羅する余裕がない。ここでは書体のサンプルも含む重要な 1 点をあげておく：T. Moriyasu, "From silk, cotton, and copper coin to silver. Transition of the currency used by the Uighurs during the period from the 8th to the 14th centuries", in: D. Durkin-Meisterernst et al. (eds.), *Turfan revisited: The first century of research into the arts and cultures of the Silk Road*, Berlin, 2003, pp. 228-239. 詳しくは森安の「シルクロード東部出土古ウイグル手紙文書の書式（前編）」(『大阪大学文学部紀要』2010 年号に発表予定) の脚注 6 を参照されたい。

42 ソグド語文献に最初に "rxyš を発見したのは Sims-Williams と Hamilton であった、cf. DTS, p. 45. ソグド語には古くから s'rt「キャラバン」というインド語からの借用語が存在していたが、この時期にはこのウイグル語からの借用語に取って代わられていたらしい。"rxyš ~ 'rxyš はいくつかの文書に現れるので定着した借用語であったことが分かる。

43 N. Sims-Williams, "Sogdian - Turkish bilingualism and linguistic interference in 9th-10th century Dunhuang", in: Zohreh Zarshenas and Vida Naddaf (eds.), *Papers in honour of Professor B. Gharib*, Tehran 2008, pp. 41-51; Y. Yoshida, "Turco-Sogdian features", in: W. Sundermann, A. Hintze and F. de Blois (eds.), *Exegisti monumenta. Festschrift in honour of N. Sims-Williams*, Wiesbaden 2009, pp. 571-585.

ベゼクリクで出土した慕闐の Aryāmān Pühr に宛てられた 2 通のマニ教ソグド語の手紙でも見られる。⁴⁴ 古いモノクロの写真からは確認できないが、この文書の場合も朱印であったに違いない。写真からは折り跡も確認できるから実際に出された手紙である。残念ながら差出人の名前も受取人の名前も残っていない。現在ベルリンに保管されている草書体の手紙の断片で、かつて W. Sundermann が研究を発表したものの一つに U 6201 がある。⁴⁵ これは手紙の冒頭部で、*So 21009 と書体はよく似ている。もしかしたら同一の手紙の離れなのかもしれない。U 6201 には krmšwxwnw 「罪の赦し」というマニ教文献特有の語が見えるので、マニ教徒が書いた手紙であったことが分かる。下でも見るように 3 行目の $\delta ynt'r$ 「マニ教僧侶」は筆者による復元であり、それをのぞけば *So 21009 には特にマニ教を示唆する語はないが、マニ教文献であることを否定する特徴は見られない。また漢字を含まない丸い朱印は筆者が知る限り、マニ教ソグド語とマニ教関連のウイグル語の文書にだけ見られる。⁴⁶

文字の読みに関する注釈でも述べるように、 $cxy\delta'yw$ (< $c\text{-}xy\delta'yw$ “from-that-one”) と読んだ語は、実際には $c'nk\delta'kw$ のように見える。しかしここでは DTS の Text G の手紙の一節が参考になる。そこには $rxys\ šw'skn\ cxy\delta'yw\ n'm'y\ rxn\delta'rw$ という表現が見え、著者らは “Une caravaine partait, par conséquent je me suis permis (d'envoyer) une lettre.” と翻訳している、cf. DTS, p. 69。そこで Sims-Williams and Hamilton がウイグル語の手紙文で並行する文例をあげているように、「キャラバンが行くから一通の手紙を認める」というのは、当時の手紙文で使われる定型句の一つであったと考えられる。 $cxy\delta'yw$ のように単語を分かち書きしないことも、これが熟し

44 吐魯番地区文物局（編）『吐魯番新出摩尼教書信文献及有關問題研究』北京 2000、pp. 3-199 に収録された筆者によるソグド語の手紙の解説を参照されたい。

45 Cf. W. Sundermann, “Three fragments of Sogdian letters and documents”, in: *La Persia e l'Asia Centrale da Alessandro al X secolo*, Rome 1996, pp. 99-111.

46 この種の円印を含む文書で、筆者が把握しているものには次のようなものがある：(1)オルデンブルグのコレクションの 1 点 (cf. Sundermann, *Altorientalische Forschungen* 12, pp. 172-174)；(2)ベゼクリクの手紙 A；(3)同 B；(4)大谷文書 No. 1967；(5)同 No. 1979；(6)So 19554（以上ソグド語文書）；(7)U 5988。最後の(7)はウイグル語文書であり、円印の中には判読はできないがマニ文字も見える。U 5988 に関しては S. Raschmann, *Altürkischen Handschriften* 13, Stuttgart 2007, pp. 55-56 も参照せよ。U 5988 以外にウイグル語文書に円印がないかという、筆者からの厄介な問い合わせに答えてくださった畏友森安孝夫教授に感謝する。

た表現であったことを示唆する。

11世紀の初めと判明しているベゼクリクの手紙との比較から、*So 21009もそれと前後する時代に書かれたものと推定できよう。従って西ウイグル国で書かれた手紙ということになり、日付は西ウイグル国の暦に従っていると考えられる。西ウイグル国の暦は中国式の太陰太陽暦で、同時代の中国本土の暦とほぼ同じであったはずである。⁴⁷仮に中国暦と同じであったと仮定して、9月5日が土曜日になる年を西暦900年から30年間で調べてみると、902年、909年、912年、926年、929年がそうであることが分かる。太陽暦ではないから周期的には現れないが、可能性がある年は非常に多いので、この日付だけから絶対年代を特定することは不可能である。

3-2 テキスト、翻訳、注釈

まずテキストと、文字の読みに関する注釈を提出する。上でも述べたように、最初の4行は文字の読みも確定せず解釈は困難を極める。ここで提出する翻訳は、あくまでも暫定的なものであることを強調しておきたい。なお写真でしか残っていないため、文書のサイズや紙質などは分からない。

テキスト (図2)

- 1 cw "δ[c]y^a w'xš 'mnw^b wm't pyrn'm^c r'δ pw(s)[ty?]^d w'c'(t)ymn^d
- 2 pr'y't(w)^e x't (wy)spw w'xš '(mn)w^b βrtpδ (')k(rt)yšt'x't^f o
- 3 'šm'xtw^g (γr)ywt(w?)^h xypδ msⁱ δ(yn)t[r]w(?)^j δs(t)y' pwsty-y
- 4 'ptškw'nw (s)"tw^k "γ'tw^l wyspw 'pt(š)k(w'n?^m s')tw βrtpδ
- 5 'krt(y)m'nw o "rxyš šwy pyδ'r cxyδ'ywⁿ ('y)c't'wy n'm'k
- 6 np'xšt(y) n'wmy m'xw pnc
- 7 sy'ty' kyw'n z-mnwy^o

47 マニ教文献に見られる西ウイグル国の暦については、吉田豊「シルクロード出土文献における言語変化の年代決定——ウイグル語文献中の借用形式の例から——」『EXORIENTE えくすおりえんて』Vol. 11, 2004, pp. 3-34を参照せよ。



図2

文字の読みに関する注釈

a "δ[c]y. "δ[']y あるいは "δ[c]w が期待される；b 'mnw. rmnw, rm'w, etc. も可能である；c pyrn'm. むしろ pysm あるいは pyšm のように見える；d w'c'(t)ymn. 後半部はインクが薄れて文字が読みづらい；e pr'γt(w) or pr'γt(w). この読みについては第 4 行目の注も参照；f (')k(rt)yšt'x't. この語でも後半部の読みは困難で、'krtyšt'nt も可能である；g 'šm'xtw. 'šm'r'tw と読むこともできる；h (γr)ywt(w). 読みは不確実；i ms. 或いは mš？；j δ[y](n)t(')[rt](w) は全くの推定である；k (s)"tw 或いは (s)γtw；l "γ'tw。t の直前のアリフ (') は短い母音を表す特別な表記 (plene writing) か？ rxn'tw "dared, ventured" とも読める；m 'pt(š)k(w'n?). 最後の文字はむしろ c に見える；n cxyδ'yw. c'nkδ'kw, etc. のように見える；o z-mnwy'. z-mwy' のように見えるが m の後の小さな筆画は文字 n のそれだと考えた。

日本語訳

「我々のところにあったどんなニュースも、前の回に手紙として送りました。それが届いたら、あなたがたが我々のすべてのニュースが分かるようにと（思っていました）。あなたがた自身のものもまた、マ〔二教僧侶〕の手によって、手紙による奏上としてすべて届きました。我々はみんなあなた方の奏上を把握しました。キャラバンが行きますから、一通の挨拶状を認めました。9月5日土曜日。」

注釈

1. 1 'mnw 「我々の」。付属人称代名詞 1 人称複数形。このテキストのように遅い時期では Wackernagel の法則に従わず、文のいろいろな場所に現れる。本来は rty-mn のように表記される。'mnw という綴りも Turco-Sogdian に特徴的で、ベゼクリクの手紙にも現れる。⁴⁸

1. 2 pyrn'm 「以前の」。通常は pyrn と綴られる。ソナントの前後の短母音の a をアレフで表記するのも Turco-Sogdian の特徴である。5 行目の 'krtym'nw 「我々は

48 吉田（上記注 44）、pp. 36-37 参照。

～になった」の助動詞のアレフも同じである。⁴⁹ 短母音の表記については下記 pr'γ'tw の注釈も参照。

1. 3 **r'δ**「回、度」。r'δは本来は「道」を意味する。DTS の Text F に ctβ'r r'δ「4 回」という表現が見える。ウイグル語の yol が「道」も「～度、回」も意味することから、ウイグル語の影響が考えられている。Cf. DTS, p. 55.

1. 4 **w'c'(t)ymn**「我々は送った」。w'c/wγt-「送る」には w'c't という二次的に作られた過去語幹も存在した。助動詞 -ymn は繫辞の 1 人称複数の形であるが、これは自動詞に使われるものである。この形からは「我々は送られた、(誰かが) 我々を送った」を意味するものと解釈される。しかしベゼクリクの手紙にはやはり、他動詞の過去語幹と繫辞の組み合わせ βš'mty 'ym が在証される。そこでは文脈から「私は送った」を意味することが期待され、筆者はウイグル語の idmīš ärtim のような、動詞の -miš 形と存在動詞・助動詞 är- の活用形を組み合わせたウイグル語の表現を下敷きにした形式ではないかと推定した。⁵⁰ ここでも同様の推定ができるだろう。

2. 1 **pr'γ'tw x't**「(そちらに) 届いたら」。pr'γ'tw は pr'γtw の綴りのヴァリエーションである。γ と t の間の短母音 a をアレフで表記するのも Turco-Sogdian でしばしば見られる。第 4 行の γ'tw も同じである。もちろん pr"γtw の読みも可能だが、*"γtw は不可能であり、書記は pr'γ'tw を意図していたと考えられる。x't は繫辞の 3 人称単数接続法形である。しばしば動詞の活用形に添えられて、「～ならば」を意味する。筆者はこれもウイグル語の ärsär を模した用法であることを論じた。⁵¹

2. 2 **w'xš 'mnw**「我々のことば、我々のニュース」。'mnw については上記参照。ここでは、名詞の直後に添えられて所有を意味する機能を担っている。この用法も tängri-m「我が主」、ada-sī「彼の友達」のようなウイグル語の用法影響である。従来は βr't'm「私の兄弟」や prn's「彼の栄光」のような例が知られている。⁵² 後にも論じるように、単数形では通常の形式 -my や -šy ではなく -m, -š になっていることは注目される。

49 Yoshida (上記注 43)、pp. 582-583 参照。

50 吉田 (上記注 44)、p. 132 参照。

51 Yoshida (上記注 43)、pp. 575-577 参照。

52 Cf. Yoshida (上記注 43)、p. 577。

2. 3 **βrtpδ 'krtyšt'x't**「あなたがたが知るように (と)」。

写真では 'krtyšt'x't の読みは必ずしも確実ではない。原文書が紛失していることはいかにも残念である。いま仮にこの読みが正しいとすると、'krtyšt' は動詞 β(w)-/'krt- 「～になる」の2人称複数過去形である。それに上で述べた x't が添えられた形式である。「あなた方が知ったならば」という意味になりそうだが、それでは文脈に合わないように思う。筆者は目的節で使われる接続法の用法として解釈した。ウイグル語の定動詞と ärsär の組み合わせはもっぱら conditional (条件法) で、この用法はないようなので、Turco-Sogdian 独自の機能の拡大だと考えられる。

3. 1 **'šm'xtw**「あなたがた」。

2 人称複数の人称代名詞の独立形に複数を表す語尾 -t を添えた形式で、ほかの Turco-Sogdian にも現れる。ウイグル語では2人称複数の人称代名詞 siz は、複数の語尾を伴う siz-lär と自由に交替するので、これもウイグル語の影響である。⁵³

3. 2 **xypδ ms δynt'rw δsty'**「あなたの物 (?) もまたマニ教僧侶の手で」。

xypδ は所有を強める表現なので直後に名詞が来ないように見えるのは奇妙である。一方で xypδ の後に ms が来ることも期待されないから、それも奇妙である。「あなた方自身のマニ教僧侶の手によって」の意味なのだろうか。δsty' は手紙やプレゼントの運び手を表すときに使われる表現であるが、Sims-Williams and Hamilton はウイグル語の elgintä に基づく表現であるとしている、cf. DTS, p. 47。

4 **s''tw**「すべて」。

アレフを2つ使うことだけでなく、この位置でこの単語が現れること自体期待されない。異なる解釈をするべきなのかもしれないが、成案がない。

5. 1 **šwy pyδ'r**「(キャラバンが) 行くので」。

通常のソグド語では多くの場合、後置詞の pyδ'r は前置詞 cnn と呼応する。前置詞を使わないことも Turco-Sogdian の特徴である。⁵⁴ ここではむしろ šwy の形式が問題である。筆者は動詞 šw-/yt- 「行く」の現在語幹から派生した動名詞あるいは現在不定詞と考える。語尾の -y は aka 語尾とも解釈できるが、軽語幹の現在不定詞特有の語尾 -y であるとも考えられる。同じく Turco-Sogdian の文献であるベゼクリクの手紙 C にも nm' n'my npys prm 「この

53 Cf. Yoshida (上記注 43)、p. 577。

54 Cf. Yoshida (上記注 43)、pp. 577-558。

手紙を書いている（時）まで」という表現が見える。そこでは重語幹の動詞の語幹が aka 語幹ではなく裸で使われ、動名詞・不定詞の機能を果たしている。これも šwy の -y が aka 語尾ではないことの傍証となるだろう。

3-3 Turco-Sogdian の使い手の問題：Winford の言語接触の理論の援用⁵⁵

3-3-1 ウイグル語のカルクにとどまらない例の存在

筆者はかつてソグド語資料とソグド人の活動を論じる論文で、いわゆる Turco-Sogdian で書かれた世俗文献を書いていた民族について論じたことがある。当時筆者はウイグル語を母語とする話し手が、文章語であるソグド語を書いたときに現れた母語干渉であると考えていた。⁵⁶ 実際ウイグル人にとっては文化的に優位に立つ民族の言語として、ソグド語の威信は高く、多くの借用語が導入された。何よりもウイグル文字そのものがソグド文字からの借り物である。従ってウイグル人がソグド語を学習していた可能性は高いのである。

ところが Turco-Sogdian の言語特徴を詳しく調べて行くうちに、その特徴のなかに、ウイグル語の影響では説明できない現象があることに気がついた。例えば、'šm'xtw がウイグル語の siz-lär を下敷きにしている可能性については上で論じたが、同様に Turco-Sogdian の文献に在証される 1 人称複数形の m'xtw という形式のほうは、それでは説明できにくい。なぜなら、ウイグル語では siz-lär と異なり biz-lär はほとんど使われないからである。⁵⁷ 同様に ärsär にもとづく x't の用法でも、定動詞形に x't を添えるという点でウイグル語に似ているが、ウイグル語では -sar を伴う conditional の形式にさらに ärsär を添える例は報告されていない。しかるにソグド語では myr'n x't 「私が死ぬなら」、wβ't x't 「あるなら」のようにソグド語の接続法形にさらに x't を添える用例が見られる。これに対応するウイグル語形の *ölsär ärsär

55 この部分は 2007 年 9 月 12 日に京都大学に於いて開催された Conference on Indo-European Studies で口頭発表した “Indo-European language confronted with Altaic: A case from Sogdo-Turkish language contact” に基づいている。

56 「ソグド語資料から見たソグド人の活動」『岩波講座世界歴史 11 中央アジアの統合 9-16 世紀』東京 1997, pp. 243-245 参照。

57 Yoshida (上記注 43), pp. 577 参照。

män や *bolsar ärsär は不可能な組み合わせである。また上で見たように 'krtyšt'x't は条件法 (conditional) ではなく、目的を表す用法で使われているように見える。これはソグド語の接続法の用法であっても、ウイグル語の -sar 形が持つ機能ではない。

DTS の Text G には、prnβyrtty prnxwnty γwβty γrβ'k šyrn'my š'nwx 「栄光を獲得し栄光を備え、讃えられ賢く、有名で優れた」という表現が見え、Sims-Williams と Hamilton は頭韻をふんだ形容詞のペアになっていることを指摘した、cf. DTS, p. 66。彼らはこれらがソグド語の単語を使った頭韻であることを強調して、ウイグル語の直訳 (カルク) に依って成立した表現ではないことを強調した。確かに bilgä bilig や alp ärdäm のようにウイグル語の hendiadys には構成要素が頭韻をふむものがあるが、これに基づくソグド語の表現はそれぞれ γrβ'y 'p'y と γny (ZY) mrt'nyh であり、頭韻は踏んでいない。しかしながら筆者は DTS の書評の中で、ウイグル語の表現に基づかずソグド語で独自に作った頭韻をふむこの組み合わせも、実はウイグル語の影響であると論じた。⁵⁸ というのも頭韻の手法はウイグル語では一般的で、韻文でも hendiadys でも非常に頻繁に用いられるのに対して、ソグド語ではここで紹介した Text G の事例と、明らかにウイグル語の hendiadys のカルクである prn ZY prnxwntkyh (～ Uig. qut qiv) のような派生関係の語の組み合わせで、結果として頭韻をふんでいるもの以外では頭韻の例が知られていない。言い換えれば prnβyrtty prnxwnty γwβty γrβ'k šyrn'my š'nwx の例は、頭韻というウイグル語にある手法を使ってソグド語使用者が独自に作成した表現であると言える。ここで注目されるのは、盲目的にウイグル語に対応する語を並べているのではなく、頭韻の原理だけを習得してそれを創造的に活用している言語使用者の姿である。

人称代名詞の付属形を名詞に添えて所有を表す表現は、現在までのところ 1 人称単数、3 人称単数、1 人称複数が知られている：βr't-m 「私の兄弟」、tmp'r-š 「彼の肉体」、w'xšw-mnw 「我々のニュース」。1 人称と 3 人称単数では、通常の付属代名詞形は -my, -šy ～ -šw であって、-m や -š はすこぶる例外的である。⁵⁹ ここでもこのよ

⁵⁸ *Indo-Iranian Journal* 36, p. 371 及び Yoshida (上記注 43) pp. 574-575 参照。

⁵⁹ 更に新しい例としては m'tm 「私の母」をあげられるかもしれない、cf. Sims-Williams, apud D. Durkin-Meisterernst, *The hymns to the Living Soul*, BTT XXIV, Turnhout, 2006, pp. 195-196.

うな例外的な形式をあえて作り出すという言語使用者の創造性が認められる。

このように、Turco-Sogdian の使用者が、ソグド語を創造的に改変する潜在力を持っていることは注目される。盲目的にウイグル式にソグド語の形態素を並べて使っているだけではない。このことは、Turco-Sogdian 使用者は自分が使うソグド語を自由にコントロールできたことを示唆する。言い換えればソグド語は彼らの母語であった可能性が高い。

3-3-2 言語接触理論と Turco-Sogdian

伝統的には言語接触による言語変化は2種類のタイプに大別される。一つは「借用 (borrowing)」であり、もう一つは、第2言語習得、とりわけ言語の取り替え (shift) の状況で、L1 すなわち話者の第一言語あるいは母語の影響が、L2 すなわち第2言語あるいは目標言語 (target language) に持ち込まれる際の (母語) 干渉である。L2 が L1 に対して威信の点で優位の言語である場合が多く、その場合は言語的基層と呼ばれることもある。ソグド語がウイグル語に対して威信言語であった状況を考えれば、Turco-Sogdian は、L1 であるウイグル語の話者が L2 であるソグド語を修得した際に、ソグド語にウイグル語の特徴を持ち込んだ結果できた、母語干渉による言語変種と見なすことができるように思われる。しかし、歴史的にみれば目標言語であったはずのソグド語が死に絶え、ウイグル語が生き残った。非常に奇妙な状況である。

言語接触による言語変化についてはいろいろな考え方やモデルが提案されているが、我々が直面している問題を考えるに当たっては、D. Winford が2005年に発表した論文が参考になると考える。⁶⁰ 彼は言語接触による変化を説明する次のような分析の枠組みを提出している。この枠組みによれば、言語が接触し一方の言語特徴・要素が他方の言語に移植されるとき、移動先の言語を「受け取り言語」(SL: Recipient Language)、移動元の言語を「差し出し言語」(SL: Source Language) と呼ぶ。特徴や要素の移動が受け取り側の言語 (RL) の動機で発生している場合には「借用 (borrowing)」と呼ばれる。一方逆に言語要素の移動が、差し出し言語 (SL) の主導

60 D. Winford, "Contact-induced changes. Classification and processes", *Diachronica* 22/2, 2005, pp. 373-427.

で発生している場合には「押しつけ (imposition)」と呼ばれる。RL と SL のどちらが主導的に作用するかは、話者にとって二つの言語のうちのどちらが言語運用の面で「優位 (dominant)」であるかによって決まる。ここで言う「優位」というのは、社会言語学的な威信の点での上下関係ではなく、心理的な意味で、どちらの言語のほうが可能で流暢に使えるかという観点からの「優位」である。RL 主導の borrowing では主に語彙が移動し、SL 主導の imposition では主に音韻と文法的な特徴が関わる。むしろ語彙の imposition も発生することはある。

ソグド語とウイグル語の関係を例に取れば、ウイグル語の中に多くのソグド語からの借用語が入っているのは周知の事実だが、それはウイグル語を母語とする話者が文化語彙を威信言語であるソグド語から借用した事例であり、典型的な borrowing である。つまりウイグル語が dominant であるウイグル人が、SL であるソグド語から語彙を借用した事例である。ここで問題にしている Turco-Sogdian では、語彙の借用はわずかで移動しているのは主に文法的な特徴であるから典型的な imposition の事例と見なすことができる。すなわちウイグル語のほうが得意な話者が、その言語特徴を彼が使うソグド語に移動させたと言える。その場合、ウイグル語のほうソグド語より dominant な話者は、ウイグル語を母語とするウイグル人である可能性がまず考えられる。これを今便宜的に「ウイグル仮説」と呼ぼう。

しかし Winford が指摘するように dominant な言語が必ず母語であるとは限らない。彼は幾つかの言語接触の事例をあげて、ある言語の母語話者が第二言語を習得する過程で、まず母語と第二言語のバイリンガルになり、後に第二言語のほう dominant になる場合があることを指摘している。典型的な例としてはアメリカ合衆国への移民の言語があげられる。移民たちにとっての第二言語であるアメリカ英語を習得した結果、アメリカ英語のほう dominant になり、その言語特徴を本来の母語に持ち込む事例を Winford は指摘している。これは英語を SL とする imposition の例であり、RL は移民たちが父祖から受け継いだ民族固有の言語である。この状況をソグド語とウイグル語に当てはめると、本来の母語であるソグド語とウイグル語のバイリンガルになった西ウイグル国のソグド商人が、圧倒的に数の多いウイグル人たちとの接触の結果、ソグド語よりもウイグル語のほうが可能になれば、dominant 言語はウ

イグル語ということになる。その状況では、ウイグル語を SL とした imposition が母語であるソグド語に働くという状況が考えられる。そのような状況で成立したのが Turco-Sogdian であるという仮説を、「ソグド仮説」と呼ぼう。

3-3-3 「ウイグル仮説」vs.「ソグド仮説」

上で想定した二つの仮説のうちどちらが真相に近いのかを決めることは容易ではない。Turco-Sogdian で書かれたベゼクリク出土の手紙 C や DTS の Text F や G を例にとると、そこに現れるのは nnyβntk 「(原義) 女神ナナイの僕」のような典型的なソグド語の人名ではなく、ウイグル語の人名ばかりである。このことは「ウイグル仮説」を支持する証拠になるように見える。なぜならこれらの手紙が書かれた 10 世紀から 11 世紀には、ソグド名を名乗る純粹のソグド人がわずかしかなかったことを示唆するからである。

しかしながら、典型的なソグド名がこの時期の文献に見られないわけではない。ウイグルの 8 代可汗 (808-821) の時代に書かれた Maḥrnāmag の奥書には、多くのソグド名が現れる。⁶¹ これは時代の点からやや古いが、東ウイグル可汗国時代には、ソグド名を名乗るマニ教徒のソグド人が少なくなかったことが知られる。西ウイグル時代に書かれたと考えられるソグド語文献のなかには、ソグド語の語彙表と呼ばれるものがあるが、その中にはソグド語の人名ばかりを集めた表もある。⁶² 下に引用するのはかつて W. Sundermann が研究したマニ教ソグド語文献の説話集 Āzand Nāmag の奥書で、一部筆者が読みを改善したものである。この文書自体も西ウイグル国時代に書かれたと考えられる。

c6 'yn'k pwsty 'z-w t't'γwr y(w)[γtym]

61 Maḥrnāmag については F. W. K. Müller, “Ein Doppelblatt aus einem manichäischen Hymnenbuch (Maḥrnāmag)”, APAW 1912 参照。なおマニ教僧侶の「法名」はカウントできない。中世ペルシア語やバルティア語の単語を二つ組み合わせた Nēw Ruwān のような名前は、当該の僧侶の話す母語や民族性とは無関係である。

62 ベルリンにある So 14761, Ch/U 6559, Ch/U 7141 がそれである。それらはそれぞれ、Ch. Reck, *Mitteliransche Handschriften*, Teil 1, Stuttgart 2006 の nos. 217, 382, 406 にあたる。

c7 ky L' pyr't βr't wγšy-("γδ)[kw]

c8 'wk'prmyš y'mcwr wn'ntm'γ t't'γw[r]

c9 s'r psy šw't t't'γwr

「この本は私 Tataγur（という名前の者が）勉強しました。信じようと思わない者は、平修士（原義：兄弟）である Wiyaši-āyaδē, Ügāb(i)rmiš(?), Yamčor, Wanant-māx, Tataγur の所に行って尋ねられたい。Tataγur（が書いた）。」

この奥書には Wanant-māx や Wiyaši-āyaδē のようなソグド名、Ügāb(i)rmiš や Tataγur のようなウイグル名、Yamčor のようなソグド語とウイグル語の混合名とが混在している。⁶³ 同じようなマニ教文献 Ch/So 19520 類の奥書には、m'xbyrt, pry-prn, xwt'yn[βntk?] のようなソグド名が見える。興味深いのはそこの一節で、破損してはいるが xwl 'wyz-wm pry-prn (qul özüm Fri-farn) 「Fri-farn（という名前の）しもべ（＝私め）自身が・・・」と読める。⁶⁴ ここではソグド名を持つマニ教僧侶がウイグル語で奥書を書いている。従って、Turco-Sogdian が書かれた時代にも確かにソグド名を持つ者がいた。⁶⁵

実際、森安孝夫は、10 世紀の西ウイグル国から中国に朝貢に来た者たちには、少なからず安、石、史のようなソグド姓を持つ者がいることを指摘している。⁶⁶ いずれ

63 この種の混合名については P. Zieme, "Hybrid names as a special device of Central Asian naming", in: L. Johanson and Ch. Bulut (eds.), *Turkic-Iranian contact areas*, Wiesbaden 2006, pp. 114-127 参照。

64 この文献については吉田「中世イラン語と古代チュルク語」『内陸アジア言語の研究』8, pp. 127-133 を参照せよ。さらに Reck『上掲書』no. 300 も参照。

65 むろん相変わらず、Turco-Sogdian の文献中でウイグル語の名前を持つ者たちの民族性の問題は残る。ただしウイグル語の名前を持つソグド人の存在も想定できる。荒川（上記注 13, p. 98）は、6 世紀の終わりから 7 世紀にかけての吐魯番出土文献や、8 世紀の敦煌出土文献に、チュルク語風の名前を名乗るソグド人がいることに注目している。これは中国人の間に定住したソグド人の場合も同じで、中国語風の名前を名乗るソグド人は多い。定住して数世代を経れば、漢語風の名前しか名乗らないというのが実態である。

66 森安孝夫「シルクロードのウイグル商人」『岩波講座世界歴史 11 中央アジアの統合 9-16 世紀』東京 1997, pp. 108-111 参照。ちなみに森安はそこで、「このような文書（吉田：Turco-Sogdian の文献のこと）はウイグル化したソグド人か、ソグド語を習得したウイグル人が書いたものであろう」としている。傾聴すべき歴史学者の見解である。

にせよ、ソグド語がまだ使われているということ自体が「ソグド仮説」を支持するように思える。なぜなら、11世紀はじめに封蔵された敦煌藏経洞発現のウイグル語文献から判明するように、この同じ時期には宗教文献も世俗文献もウイグル語で書かれており、とりわけ手紙のような世俗文書でウイグル人が敢えてソグド語を使う理由が見当たらないからである。ソグド語とウイグル語のバイリンガルのソグド人が、自身の民族的なアイデンティティーからソグド語を使ったと考えるほうが合理的に思われる。⁶⁷

3-3-4 「ソグド仮説」の図像などによる傍証

森安は上で言及した研究のなかで、西ウイグル国のウイグル商人は実は民族的にはソグド人であったことを論証したが、その際仏教壁画も証拠として使っている。トルファンのベゼクリク千仏洞で見つかるいわゆる誓願図は西ウイグル国時代に制作された壁画であることを論証した森安は、誓願図のなかでは、商人が過去仏に布施をして授記を得るシーンに注目している。その内の一つを見てみよう（図3）。この壁画には梵語の銘文があり次のように読まれている。

āṅgirasam ahaṃ dr̥ṣṭvā nādidiram (nādi-tiram) upāgatam
sārthavāhena me nāvā nadyām uttarito munim ||

“Als ich den ans Flußufer herangekommenen Aṅgiras erblickte, habe ich, der Kaufherr, den Muni auf meinem Schiffe über den Fluß übergesetzt.”⁶⁸

森安は、ここに描かれた荷物を積んだラクダやロバを伴う商人の容貌が、一様にモンゴロイドではなくコーカソイドのそれであることに注目し、人種的にはモンゴロイド

67 DTS の Text A ではソグド語とウイグル語のコードスイッチングが観察される。Yoshida（上記注 43）p. 582 参照。

68 Cf. von Le Coq, *Chotscho*, Berlin, 1919 (reprint Graz, 1979), Tafel 28. 参考のため村上真完の日本語訳を引用する：「私はアングラス（仏）が川の岸に来られたのを見て、隊商の頭であった私によって、牟尼（＝仏）は川を舟によって渡らされた。」（村上『西域の仏教』東京 1984, p. 241）。



图 3

であったウイグル人をモデルにしたものではありえないと論じた。⁶⁹ さらに森安は、「髪は巻いており、目は深く、眉はきれいで濃い。まつ毛のあたりから下には頬髭が多い」という、12世紀の漢文史料『松漠紀聞』にある西ウイグル国の商人の記述を引用して、彼らがコーカソイド的な風貌をしていたことも指摘している。

これらの状況証拠を勘案すれば、「ソグド仮説」のほうが支持されるように思われる。つまり Turco-Sogdian の使用者は、ソグド語化したウイグル人ではなくウイグル語化したソグド人であったということになる。この文脈で想起されるのは Turco-Sogdian という名称を考案した Sims-Williams が、その使用者に関して次のように書いていることである。

“The syntax too contains many unusual constructions, with a proliferation of non-finite verbal forms, suggesting that the writers, even though they wrote in Sogdian, were more accustomed to thinking in Turkish”.⁷⁰

無論 Sims-Williams 自身は慎重で、「ソグド語よりトルコ語で考えることのほうに慣れている」者が、民族的に見てソグド人であったのかウイグル人であったのかについての言明は避けている。しかし筆者はやはりソグド人がウイグル語化したという説を支持したいと思う。興味深いことに西ウイグル国の隣にあったカラハン朝の首都である Balāsāyān にいたソグド人について、11世紀の Maḥmūd al-Kāshgarī は次のように言っている。

69 壁画で描かれた世界はインド世界であり、必ずしも同時代の西ウイグル国の状況を反映する必要はない。しかし、絵師たちが壁画に登場する商人を、同時代に回りにいた商人をモデルにして描いていたことは十分に考えられる。時代は異なるが、キジル石窟に描かれた仏教説話中の交易商人は、同時代のソグド商人をモデルとしていることが知られている。この点は E. Kageyama, “Sogdians in Kucha, study from archaeological and iconographical material”, in: E. de la Vaissière and E. Trombert (eds.), *Les Sogdiens en Chine*, Paris, 2005, pp. 363-375 参照。敦煌壁画の例は吉田豊「ソグド商人の時代」『週刊シルクロード紀行 No. 13 ペンジケント・ドシャンベ』(週刊朝日百科) 2006、pp. 12-15 で論じた。

70 Cf. Sims-Williams, “Sogdian and Turkish Christians in the Turfan and Tun-huang manuscripts”, in: A. Cadonna (ed.), *Turfan and Tun-huang the texts. Encounter of civilizations on the Silk Road*, Florence, 1992, p. 56.

“... They are from Soʻyd which is between Bukhara and Samarqand, but their dress and manner is that of Turks.”⁷¹

ここの manner に言語が含まれていたかは分からないが、ソグド人がチュルク化しているという現実を強調していることは明らかである。アナトリアのトルコ語圏に居住するギリシア人の話す、著しくトルコ語化したギリシア語について詳しく研究した R. M. Dawkins が言った次の有名な言葉は、Turco-Sogdian に関する Sims-Williams の言葉や Maḥmūd al-Kāšgarī の報告と驚くほど良く似ている。

“... the body has remained Greek, but the soul has become Turkish.”⁷²

11 世紀中央アジアのチュルク人国家であるカラハン朝や西ウイグル国のソグド人は、チュルク人風に考え行動するほうに慣れて、その言語は現代のアナトリアのギリシア人の言語ように、「身体はソグド語だが精神はトルコ語」になったのではないだろうか。⁷³ 11 世紀を最後にソグド語の資料はなくなるから、ソグド語が死語になる直前の姿であったと言えよう。

4 おわりに

本稿ではチュルク語を話す民族とソグド人との接触のなかで成立したいくつかのソグド語資料を時代順に見てみた。書写言語を持たないチュルク系の遊牧民に対して、文化的に優位に立つソグド人が文化語彙や文字までも供給した時代から、やがてソグド人自身がチュルク語化しチュルク人の中に埋没して言語を失うまでの 500 年ほどの

71 Cf. Dankoff and Kelly, *Maḥmūd al-Kāšgarī. Compendium of the Turkic dialects. (Dīwān Luḡat at-Turk)*, Harvard, 1982-1985, vol. I, p. 352.

72 Cf. Dawkins, *Modern Greek in Asia Minor*, Cambridge, 1916, p. 198.

73 アナトリアのギリシア語も一様にトルコ語化しているのではなく、村々の教育や伝統の違いでトルコ語化の程度に違いが見られることが指摘されている。ベゼクリク出土の手紙でも、手紙 B などはウイグル語の影響がそれほど強くない言語で書かれている。

時代である。ただ本稿で扱ったのはソグド本土から見れば東方のチュルク語圏で起ったことであり、ソグドの故地での状況について考察していない。残念ながらソグディアナでは8世紀はじめのムグ文書をのぞけば、まとまった資料が残されておらず、それ以降ソグド語が廃用されるまでの言語状況は十分にトレースできないというのが実情である。⁷⁴ わずかに残る言語資料から、西突厥による支配以降のソグドのソグド語とチュルク語との言語接触の実態をどれほど解明できるかは、将来の課題である。

74 以前に指摘したように、ムカッダシーが伝える10世紀の、サマルカンドやブハラの言語は既にペルシア語である。その時代にも都市部以外ではソグド語が使われていたようである。この点については桑山正進（編）『慧超往五天竺國傳研究』京都1992, p. 168にある筆者のノート及びYoshida, “Sogdian”, in: G. Windfuhr (ed.), *The Iranian languages*, London and New York, 2009, pp. 279-335、特に329-330頁を参照せよ。ヤグノーブ語はソグド語の唯一の生き残りである。

補注

(1) 1-1で言及した「乙毘」を要素とする突厥の人名については、次の稲葉稜の論文も参照せよ: M. Inaba, “Nezak in Chinese sources”, in: M. Alram et al. (eds.), *Coins, art and Chronology II. The first millennium C.E. in the Indo-Iranian borderlands*, Wien 2010, pp. 191-202, esp. p. 194.

(2) 2-3で扱った、突厥第二可汗国崩壊後のモンゴル高原の情勢に関しては、鈴木宏節「新発見のブンブグル碑文とモンゴル高原の覇権抗争—カルルクから見た八世紀中世の北アジア—」荒川慎太郎他編『遼金西夏研究の現在』(3)、東京2010, pp. 1-30参照。